



SIGNIS JAPAN ニュースレター

タリタ・クム！ 起きなさい！

発行：SIGNIS JAPAN（カトリックメディア協議会）

代表：千葉茂樹

発行所：〒107-0052 東京都港区赤坂8-12-42

聖パウロ女子修道会内

Tel 03 - 3479 - 3941 E-mail: info@signis-japan.org

http://signis-japan.org/

「東日本大震災」から5カ月。しかし夏休みというのに、被災地に子供たちの元気な歓声は戻っていません。出口の見えない原発事故の収束、牧畜、農業、漁業関係者を襲う深刻な放射能被害…。こうした中で「タリタ・クム」7号（聖母被昇天祭号）をお届けします。どんな時であっても、母マリアの慈愛と祈りのまなざしが私たちに注がれていることを信じて。

ニュース

会長・千葉茂樹に Gospel Media 賞授与とローマ上映

6月3日からポーランド、ワルシャワ市郊外、ニエポカラノフ修道院（聖コルベ神父創設）で第26回ニエポカラノフ国際カトリック映画祭が行われました。千葉茂樹・好美ご夫妻、お嬢様と、町田の4名が日本代表団として参加しました。今回は世界から映画170本、テレビ30本の応募があり、優秀な作品が上映されました。6月4日、通常上映では「マザー・テレサと生きる」が、閉会式後、特別に「コルベ神父の生涯 アウシュビッツ、愛の奇跡」が上映されました。長年の映画による福音宣教への貢献に対して千葉監督に、特別賞 Gospel Media Award が贈られ、万雷の拍手。日本チームとしては誇らしく、大喜びでした。

Gospel Media 賞を受賞する
千葉茂樹監督

その後、ローマに移動し、6月7日、教皇庁広報評議会の Celli 大司教にお会いできました。世界が世俗的になって宗教的価値観が失われつつある中、宗教に根差した良い映画が必要であり、今後も頑張っしてほしいと励ましをいただきました。午後の上映会はバチカンラジオのマルコーニホール、バチカンラジオの和田神父様にも来ていただけました。



Celli 大司教とともに

6月8日、SIGNIS Services Rome (SSR) を訪問。特にアフリカや南米の司教区へのFM放送設備やミニTV局、衛星経由インターネット等の技術サービスをしている現場を見学しました。午後はローマ市郊外のサレジオ大学のソーシャルコミュニケーション学部にて上映会を開催。立正佼成会からの留学生も来てくれました。良い作品でも自分から積極的に観てもらおう場を作る必要性を痛感しました。

第35回日本カトリック映画賞授賞式&上映会

5月28日(土)小田急線・新百合ヶ丘駅から徒歩3分の川崎市アートセンター小劇場で「第35回日本カトリック映画賞授賞式&上映会」が開かれました。今年は浦和商业高校定時制の4年間+αを追った太田直子監督の「月あかりの下で-ある定時制高校の記憶-」が選ばれました。授賞理由の説明の中で、SIGNIS JAPAN 顧問司祭の晴佐久昌英神父は、「この映画のテーマは居場所、そこにいていいんだという場所、…迎える人のいるところ」、「自分でも作ろうという気付きを与えてくれる」。「実はカトリック教会は居場所作りをしている。対応しているのはイエス・キリスト」。「この映画で励まされ勇気をもらった」、「この映画を自信を持って皆さんに見ていただきたい」と語りました。上映中、観客の笑い声が何度も聞こえました。また、上映会後、太田直子監督の講演があり、映画作りのきっかけ、生徒達との交流、さまざまなエピソード等、ごく自然なエピソードを和やかな雰囲気の中で語り、盛会の内に閉会しました。一番の驚きは非常に多くの方々がアンケートに答えてくださり、びっしりと感想を書いてくださったこと。皆さん、この映画で、若者への理解、誰も排除しないという教育方針、居場所と気付き、そして太田監督への讃辞を書いておられました。なお、チケット代の一部と会場での募金は、東日本大震災への義援金に送らせていただきました。



会員紹介

聖パウロ女子修道会——Sr. 清水京子



女子パウロ会（聖パウロ女子修道会）は、団体会員として SIGNIS JAPAN に参加しています。SIGNIS の前身である OCIC（国際カトリック映画・視聴覚メディア協議会）の時代からの参加で、前任者の Sr. 白井詔子は、日本の会長としてアジアの中で、またベルギーにある本部組織の理事として世界的にも活躍しました。インターネットが世界に広がり、放送と視聴覚メディアを分けて語ることができなくなり、OCIC と UNDA（国際カトリック・ラジオ・テレビ協議会）が統合され SIGNIS となって 2001 年から活躍を始めました。時代の移行期にあたる同じ時、私は 2000 年に 50 代半ばという若さで亡くなった Sr. 白井の後を受けて会議に参加するようになり、早 10 年が過ぎようとしています。総会とカトリック映画賞がそれまでの主な外部へ向けての活動でしたが、地域教会のホームページ作りを共に学ぼうとインターネットセミナーを年 2 回開催するようになりました。その影響でしょうか、信徒の会員が増え、毎月定例会が開かれるようになり、活動は活発になりました。女子パウロ会の使命には、メディアを使う人へのメディアリテラシーの養成があります。この働きを、司祭や信徒の方々と共に SIGNIS の活動の中で行えることは、うれしいことです。メンバーが自分のできることを提供して活動が行われています。これからも互いに刺激し合い、協力しながら、メディア・コミュニケーションを通して神の愛を多くの人々に伝えることができますように。

8月15日というと、皆さん何を思い出されるでしょう。「終戦記念日」、あるいは地方に実家がある方なら「お盆」でしょうか。カトリック教会にとって8月15日は、聖母マリアが地上での使命を終えて、その魂と肉体が共に天に上げられたことを記念する「聖母の被昇天 (assumptio Mariae)」という、とても重要な意味を持つ祭日です。以前は「大祝日」として「守るべき祝日」に定められ、荘厳盛大に祝われていました。しかし教義として定められたのは意外と新しく、1950年、教皇ピオ十二世の教皇令「Munificentissimus Deus」以来ですから、まだ61年なのですね。

マリアはミリアムのアラム語読みで、当時のユダヤでは「イエス」と同じく、ごくありふれた女性の名前でした。エル・グレコ、カラバッジョ、ダ・ヴィンチ、ティツィアーノ、ラファエロなど、西欧絵画の巨匠たちの作品でおなじみの美しく、気高く気品にあふれたそのお姿は、後世の人々の「マリア」に対するイメージを決定づけ、それは21世紀の今日に至るも私たちの心にしっかりと根を下ろしています。

もう30年以上も前ですが、学生時代に聞いたある司祭の説教が今も鮮明に記憶に残っています。「皆さん、マリア様というと、美人でやさしく、清楚でたおやかな顔を想像されるでしょう。それは事実です。でもそれは“内面の美”なのです。中東の苛烈な日差し、からからに乾燥した熱風などで顔は陽に焼け、その手足は日々の激しい労働でひび割れ、皮膚は固く、しわが無数に走っていたでしょう。その外見は私たちの思い描くマリア様とはまるで違っていたと思います。でも、確かにマリア様は並外れて美しく、忍耐強く、賢く、謙虚でそして強かった。その陽焼けした顔は腕に抱いた幼いイエスを、慈愛を込めて見つめ、真実の愛と優しさ、寛容の大切さを無言のうちに伝え、また夫ヨセフの日々の生活上の苦悩や不安を共有した顔でした。ひびわれたその手は、毎日毎日井戸から水を汲み、パンをこね、イエスを立派に育て上げた「労働者の手」でした。そしてその両足は、みな恐怖で逃げ散った後も、逃げることなく周囲の嘲笑と恐怖の中で鮮血のしたたる十字架の足元にしっかりと立ち、わが子の最期と神の救いの成就を受容した足でした。マリアの美、それはまさしく『母の美』でした」と。



最近、幼児虐待や折檻死などの報道に接する度に、鋭い痛みと共に聖母の陽に焼けた顔と、愛と賢慮にきらめくまなざしを思います。「幼子の存在、それは神がまだ人類に絶望していない証拠である」という賢人の言葉とともに。

被災地探訪 瓦礫の原野にキリストを求めて

3月11日、私は東京の神谷町、地下鉄の中で「あの時」を迎えた。思いのほか人々は平静で、情報が入らない数時間、音のない世界に沈んでいるような気持ちだった。その後、精魂尽き果てるような思いをして鎌倉に辿りついたのは朝方だった。凍えそうになって行列していた戸塚の駅にはあれ以来降り立つ自信がない。

帰ってから半日、昏々と眠った。目覚めて、津波の映像を見た。驚かなかった。知っている、と思った。私は意識の深いところで、この光景を見たことがある、と感じていた。それから2カ月、震災に関わるいろいろな行事や支援に、まるで引力に引かれるように取り込まれてきた。毎日、被災地のことを思わない日はない。というより被災地のことを感じていない時の方が少ないのだ。これは、不思議というよりも、自分はおかしいのではないかとさえ時々思う。私にとっての日常はすっかり変わってしまった。

その「ほんとうのところ」を確かめたくて、周りを強引に巻き込むかたちで被災地入りした。初めはいくつかの撮影のプランもあったのだが、夢中でビデオを回し続けていたのが現実だった。「瓦礫の原野」は鳥の声だけが響いている音のない世界。圧倒される現実には、解説も、編集も、まったく必要がない。そして、何もかも失くした中で懸命に働く人、人、人。同行した司祭は、後日「あの旅は、巡礼だった」と話したそうである。

最終日に、仙台市若林地区の入口の水田跡でミサをささげた。ダンボール箱を祭壇にして。その様子も動画におさめたが、前号の「タリタ・クム」を見て驚いた。菅又俊世さんが写真におさめて来た場所と同じなのである。「若林区荒浜地区」の車が写っている写真だ。メディアを使ってこそその共有体験である。震災の記憶を写真で残そうという運動もあるが、カトリックの信仰を持つ者が見た「キリストのいる風景」を残せたらと思う。

3月11日によって、人々はたくさんのものの失ったが、それがなければ決してなかった出会いが無数にあるのも事実だ。事実、カトリック釜石教会に置かれた釜石ベースキャンプには、キリスト教とは無縁だった若者たちがたくさんボランティアで訪れており、その中で、自分を仕切り直している人もいると聞く。若者の声が響く教会は、廃墟と化した街の灯台のようで、高齢の信徒たちも、「小



宮古の避難所からの風景



仙台市若林地区の入口の水田跡でのミサ
大槌町の瓦礫の原野



さなカリタスの会」をたった3人で立ち上げて復興支援に立ち上がったそう。もちろん、現実には厳しいが、あの「瓦礫の原野」のどこかにキリストがたたずんでいたのではないかと考えてならない。

(林里江子)